医事・文談　九百八十二

《正岡子規（36）の続き》その270

子規周辺の人びと（二十）

平岸　三八

本稿九百六十四に、子規周辺の人びとして21名の人物の名を挙げた。勿論、これだけで済む筈はない。まだまだ挙げるべき人はいるが、まずはこれくらいで、子規と関りを持ったうちの重な人物とすることとする。

これらの人びとは、子規の先輩もあり、学友と称すべき人、或は同輩、門下生もあり、その関係は一様でない。

このほかに身内としては、母八重の弟加藤恒忠（拓川）、大原恒徳を挙げるべきだろう。拓川は子規に上京をうながし、その後も経済的援助を続けたし、恒徳は幼にして父を失った子規の後見人となり、秩禄処分による家禄奉還の一時金を管理して正岡家の家計殊に医療費について子規からの請求に応じていたことは特筆すべきであろう。これらについては本文中にしばしば記述した。

子規は病気のため進んで交を求めることは不可能であった。殊に晩年の五年間は、病床六尺に針付けにされ、外出もままならぬのに、多くの一流の人びとと交際を持ったのは、多くは文筆活動を通じておのずから集った人が多い。

これから周辺の人びとについて、子規との関り及び子規死後のことも記述したいと思う。なかには既にかなり詳しく書いた人もあるので、それらの人については簡略を期すつもりである。その他なお洩れた人についても記述するつもりである。

関係する人びととして、まず医師を挙げるべきであろう。幾人もの医師の診察を受けていて、帝国大学医科大学の内科、外科の教授の診療を受けているなど、当時としては異数といわねばならない。それも大学附属医院に於てではなく、往診を受けているのであるから、陸　羯南などの紹介によるのであろうが、なかなか一般庶民の容易に受けられることではなかった。

医師のうちで分かっている最も早いのは、明治12年夏、擬似コレラに罹り、松山で開業していた安倍義任医師の診を受け全快した。

擬似コレラとは、多分急性の大腸炎の劇しいものだったであろう。

安倍医師の経歴については不明であるが、哲学者で、京城帝大、第一高等学校、学習院などの教授を勤め、戦後文部大臣となった安倍能成の父である。

この安倍医師に対する礼状が、講談社版子規全集書簡編の巻頭にあり、現存する子規書簡の最も古いものである。酒一樽を添えた書簡でるが、全文を本稿九百六十九に載せてある。「時厳寒ニ逢フ国手請フ自愛セヨ」と文末にあるように、とても少年の筆とは思えないようなものだ。

次に分かっているのは、明治22年の喀血に際して受診した医師である。5月9日、何の前兆もなく喀血した。翌10日も喀血し、山崎元修という医師の診を受け、肺が悪いといわれた。

山崎医師については、岩波文庫の『漱石・子規往復書簡集』の注に、本郷真砂町に開業していた医師で、医学校第一回卒業生とある。東大医学部同窓会鉄門倶楽部の「会員氏名録一九八九」によると、明治9年卒業に山崎玄修という名がある。これは元修の誤植と思われる。

この山崎医師については、漱石が本郷真砂町常盤会寄宿舎の子規宛の書簡で触れている。

それによると漱石が何人かの級友と子規を見舞い、その帰途、同医師を訪い子規の病症並びに療養法につき詳しい質問をしたところ、同医師は在宅したにも拘らず、取込と称して面会せず、止むを得ず取次を通じ尋ねたところ、存外の軽症で入院にも及ぶまいとのことだったとしながらも、山崎のような不注意、不親切な医師は断然廃し、幸い大学病院が近くにあるのだから入院した方がいいだろうと切々とすすめているのである。

この時の喀血は一週間ばかり続き、その後も血痰が一ヵ月途続いた。その間、同医師にかかっていたのか不明であるが、漱石の勧告の如く入院はしなかった。しかしこれが子規一生の重患の始まりである。